



Data

監督: マーク・ペリントン

出演: シャーリー・マクレーン/ア
マンダ・セイフライド/ア
ン・ヘッシュ/トーマス・サ
ドスキー/フィリップ・ベイ
カー・ホール/トム・エヴェ
レット・スコット/アンジュ
エル・リー

■■■ショートコメント■■■

◆公式ホームページによれば、本作の「イントロダクション」は次の通りだ。

世界的に高齢化社会が進み、日本でも終活への意識と注目度はますます高まっている。そんななか、誰もが人生を見つめ直したくなる感動作が新たに誕生した。この物語はすべてを意のままにコントロールし、裕福な老後生活を送る女性が自分の計報記事を書かせようと思い立つことから始まっている。

広告業界で成功を収めた老婦人のハリエット・ローラーは、何不自由なく暮らしていたが、80代に入ってから孤独と死への不安を感じていた。そこで、ハリエットは自身の計報記事を生前に執筆することを思いつき、地元の若い新聞記者であるアン・シャーマンに依頼する。しかし、自己中心的なハリエットのことを良く言う人はおらず、理想とかけ離れた原稿を読んだ彼女は、最高の計報記事には欠かせない4つの条件を満たすため、自分を変えることを決意するのだった。その答え探しを手伝うことになったアンは、性格がまったく違うハリエットとぶつかり合っていたが、いつしか2人の間に芽生えていたのは、世代を超えた友情。そんなハリエットとの出会いによって、人知れず悩みを抱えていたアンの未来も変わり始めていた……。

自分勝手ながらも周りを巻き込むパワーを持つ主人公ハリエットを演じたのは、60年以上にわたってハリウッドを支え続け、いまなお輝きを放つ大女優シャーリー・マクレーン。そして、記事を書くために雇われた若い新聞記者のアンには、若手女優のなかでも同世代の女性たちから絶大な人気を誇るアマンダ・セイフライドが指名された。2人は初共演にも関わらず、息の合ったやりとりを披露している。

今回、シャーリーとアマンダはプロデューサーとしても携わっており、本作で描かれているテーマに対する関心の高さを伺わせるが、昨今のアメリカでは自身の計報記

事を自分で書きたがる人が増えているという。実際、脚本家のスチュアート・ロス・フィンクはその事実から着想を得て脚本を作り上げていった。そして、同じくこの題材に興味を示したマーク・ペリントンが監督と製作を務め、キャスト・スタッフともに完璧な布陣が揃うこととなる。

人生の終わり方を考える現代の風潮を見事に捉えつつ、一方で始まったばかりのキャリアに悩みを抱える若い女性の姿も丁寧に描いている本作。すでに幅広い層から共感を得ている珠玉のハートフルストーリーは、いくつになっても人生は綴り直すことができるのだという勇気と希望を与えてくれるはずだ。

◆公式ホームページによれば、本作の「ストーリー」は次の通りだ。

ビジネスの成功で財を成した老婦人のハリエットは何不自由なく暮らしていたが、80代に入ってから孤独と死への不安を感じていた。そんなある日、新聞の訃報記事を目にしたハリエットは、自身の訃報記事を生前に執筆することを思いつき、地元の若い新聞記者であるアンへ依頼することに。アンは仕方なく周囲への取材を始めるが、疎遠になっていた家族だけでなく、かつての仕事仲間から地元の牧師まで、ハリエットのことを良く言う者は誰一人としていなかった。

その後、理想とかけ離れた原稿を読んだハリエットは、“最高の訃報記事”に欠かせない4つの条件を満たすため、自分を変えることを決意。その要素とは、家族や友人に愛されること、同僚から尊敬されること、誰かの人生に影響を与えるような人物であること、そして記事の見出しになるような人々の記憶に残る特別な何かをやり遂げることだった。そこで、まず地域のコミュニティセンターを訪ねたハリエットとアンは、9歳のやんちゃな少女ブレンダと出会い、親交を深めることとなる。

そして、ハリエットが次に向かった先は、なんと地元のラジオ局。子供の頃からラジオと音楽を愛していたハリエットは、長年コレクションしていたレコードを持参し、自分をDJとして採用するように直談判する。そこで81歳にしてラジオDJデビューを成し遂げ、独自の経験でしか手に入れない、人々の記憶に残る条件をクリアするのだった。

4つの条件のうち、難題と思われていたのは何十年も連絡を取っていない娘との和解。そこで、ハリエットとアンとブレンダの3人は娘の暮らす町まで一緒に旅に出ることに。久しぶりの再会に気まずい空気が流れるものの、娘が幸せに暮らしていることを知ったハリエットは「自分はいい母親だった」と満足し、目的を果たす。

楽しい旅の余韻に浸りたいハリエットだったが、医師から余命わずかであることを告げられ、訃報記事を書き直して欲しいとアンにお願いする。何事にも強気なハリエットと一歩を踏み出す勇気のないアン。正反対の2人はぶつかってばかりいたが、いつしか世代を超えた友情が芽生え始めていた。そして、人知れず悩みを抱えていたアンの気持ちにも少

しずつ変化が起きることに。

ついにハリエットは、4つの条件をやり遂げ、アンとブレンダとともにダンスを楽しみながら、自宅で至福の時間を過ごしていた。しかし、別れのときはすぐそこまで来ていたのだった……。

◆ “終活” への意識と注目度が高まる中、すべてを意のままにコントロールし、裕福な老後生活を送る女性ハリエット・ローラー（シャーリー・マクレーン）が、生きている間に自分の訃報記事を書かせようと思いつ、という本作のモチーフは、確かにユニークで面白い。しかし、そもそも訃報記事は数行の小さい記事だから、そこに一人の女性の人生を盛り込むのは到底ムリ。しかして、本作のクライマックスとなるハリエットの葬儀で、アン・シャーマン（アマンダ・セイフライド）が書いた訃報記事を読むという設定は、いつの間にか、アレレ、違う展開に……？

◆ ベテラン俳優、シャーリー・マクレーンは、嫌味タップリなクソババアの面と、人間味にあふれ、味のある良いおばあちゃんの面を、うまく引き出しているのはさすが。また、当初はハリエットに反発しながら、次第に自分の母親以上の親しみと尊敬の念を抱き始め、ハリエットへの取材を通して、自分の生き方を大きく変えていくアンを演じるアマンダ・セイフライドも小気味のいい演技を見せてくれる。

しかし、テーマ設定にそもそも無理があるだけに、2人の演技も少し空回り。私はそんな感想を持ったが……。

2018（平成30）年 3月20日記